

【巻頭随想】

新型コロナの感染拡大に鑑み

奥田 徹

山梨大学

On the Occasion of ASEV JAPAN 2021 Annual Meeting

Tohru OKUDA

University of Yamanashi

昨年（2020年）は名城大学（名古屋）での大会を企画しておりましたが、コロナ禍の蔓延により、名古屋大会を延期し、急遽オンラインに変更となりました。本年は延期した名古屋大会の開催を夢見てきましたが、変異株の拡大などの状況を鑑み、再びオンライン大会とする苦渋の決断をいたしました。この間、実行委員長をお願いしていた名城大学の中尾先生には、教室の確保からコロナ対策まで、大変なご尽力をいただきましたことに、厚く感謝を申し上げます。来年2022年は、三年ごとに実施している親学会から代表者を招聘する年となっております。そのため、来年の学会大会は山梨での開催を考えておりますが、その後は幻となっている名古屋大会も含め、拡大する日本ワイン産地での学会開催を考えたいと思っております。

さて、昨年のオンライン大会はいかがだったでしょうか？多くの方から、発表の聞き直しなどが出来て良かったとのご意見をいただきました。Zoomの普及も相まって新型コロナ禍に対応するために、多くの国内外の関連学会大会やシンポジウム、研究会等もオンラインで聴講できるようになりました。昨年12月に開催された北大ロバスト「道産ワインの未来のためのオープン勉強会」、今年5月に開催されたOenoviti International（ボルドー大学が主幹）のシンポジウム、そして今年6月のモンペリエSupAgro

（農業科学高等教育国際センター）のブドウ・ワイン部門（IHEV）主催のミニシンポ等です。本学会の親学会にあたるASEVもオンラインで、日本からの参加が可能となりました。国内外のブドウ・ワインに関する研究や調査報告等を現地に行くことなく聴講することができるのは、たいへんな朗報と言えます。この方向は、恐らく新型コロナ禍が終息した後も続くと考えられ、会員各位には大いに活用してもらえればと考えます。

日本ブドウ・ワイン学会の設立に大変な尽力をいただいたUC DavisのRoger Boulton先生は、ワインに関する課題は「普遍的課題」と「地域的課題」に分類でき、発酵・酸化・微生物汚染などの「普遍的課題」は世界から情報を得れば良い、ブドウの栽培やブランド化など「地域的課題」は現地で一生懸命やりなさいと言われました。日本ワインコンクールなどに多大な尽力をいただいているボルドー大学のGille de Revel先生も、国内での情報共有が重要だと言われております。日本ワインをさらに良いものにするために、コロナ禍により発達したオンライン技術も活用し、情報共有することが学会の役割であると思っています。

海外のワイン業界では、コロナ感染の後遺症による嗅覚障害が懸念されています。ワクチン接種が拡大され、コロナが収束する迄、もう少し辛抱が必要

です。ぜひ、会員各位も十分にご用心ください。本年は叶いませんが、コロナ収束後の大会で、グラスを持ちながら、ポスターの前で皆様のお話を伺う日を楽しみにしております。